

写真22 出土土器

11 田多地小谷遺跡

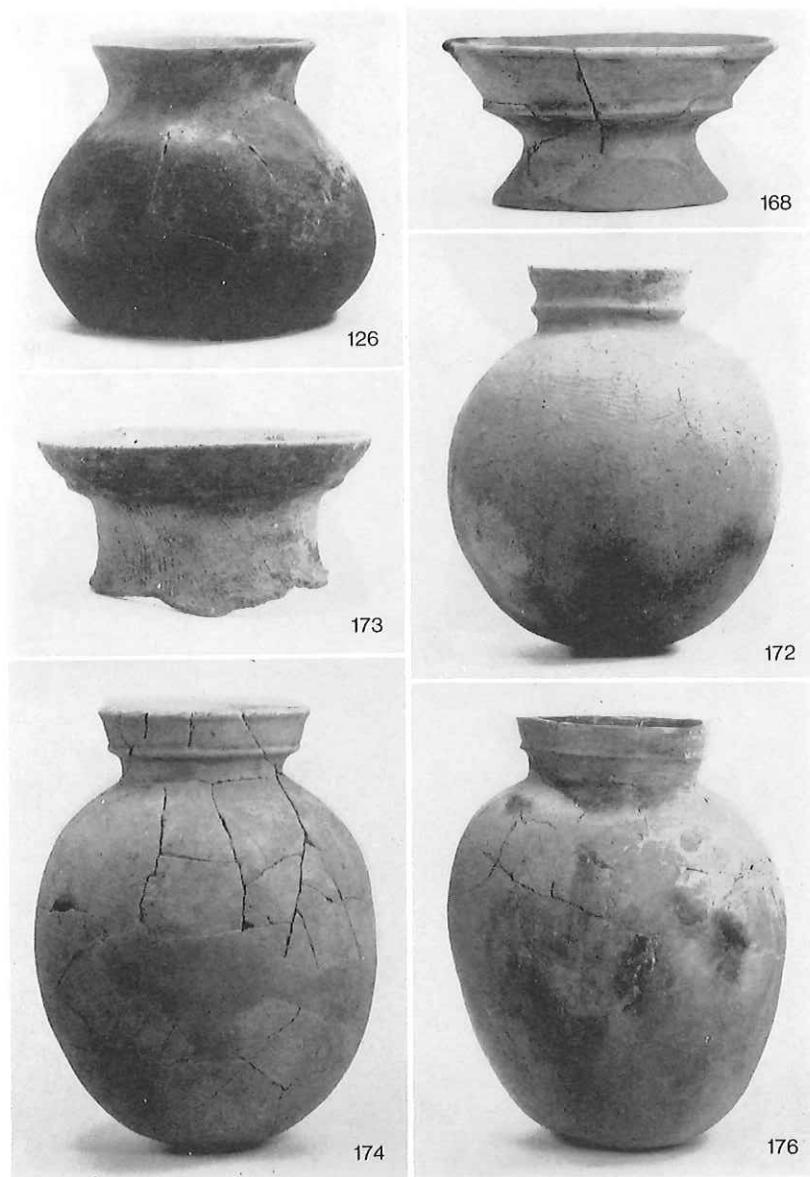


写真23 出土土器



写真24 出土土器

11 田多地小谷遺跡

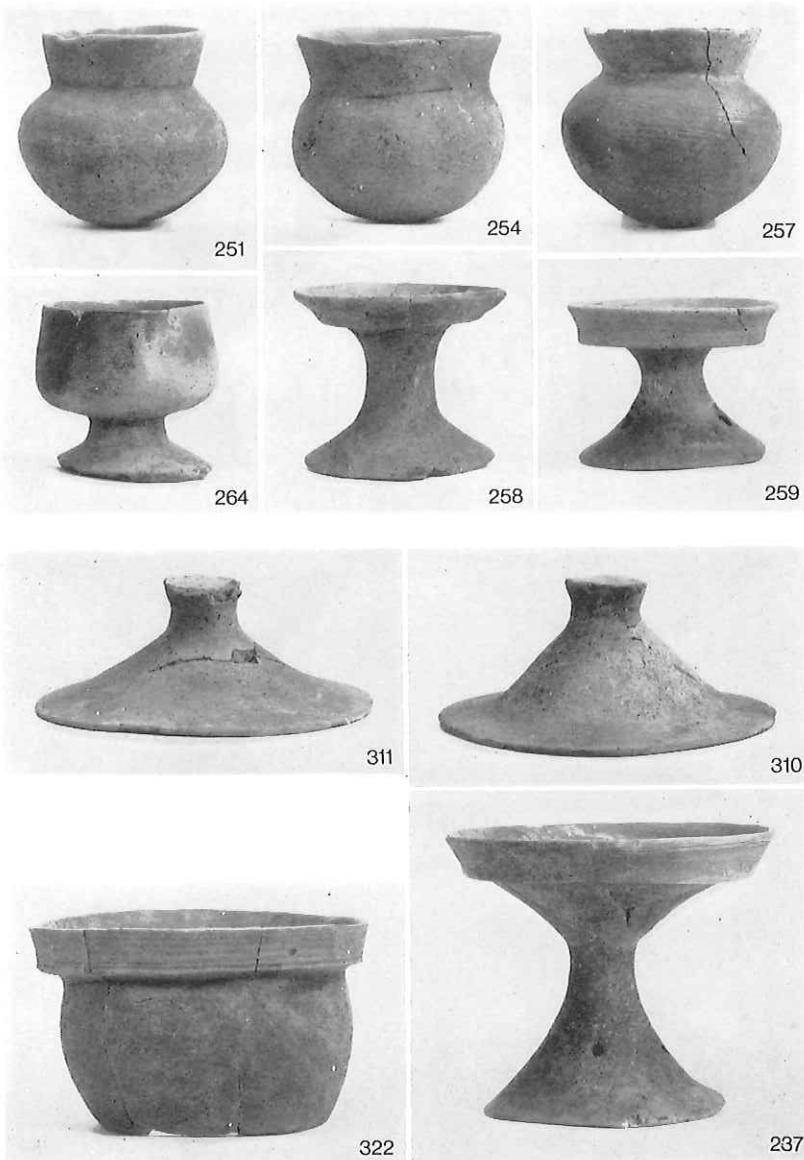


写真25 出土土器

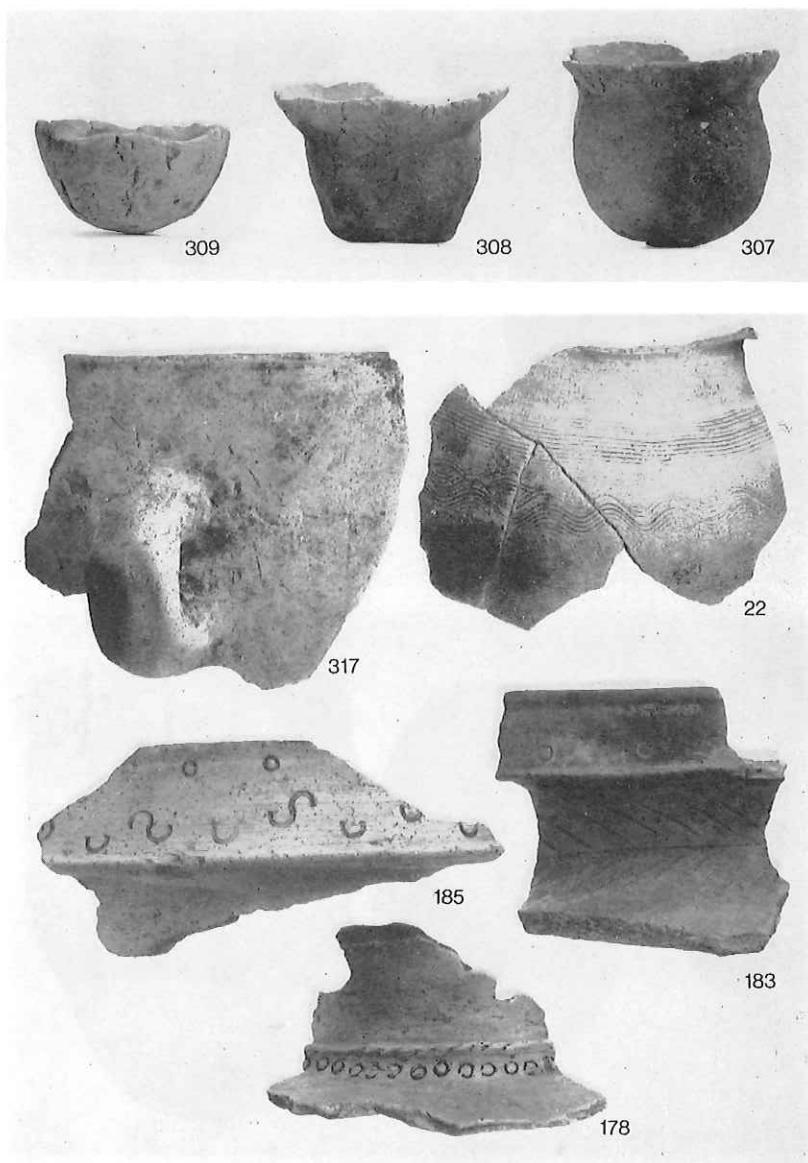


写真26 弥生土器

11 田多地小谷遺跡

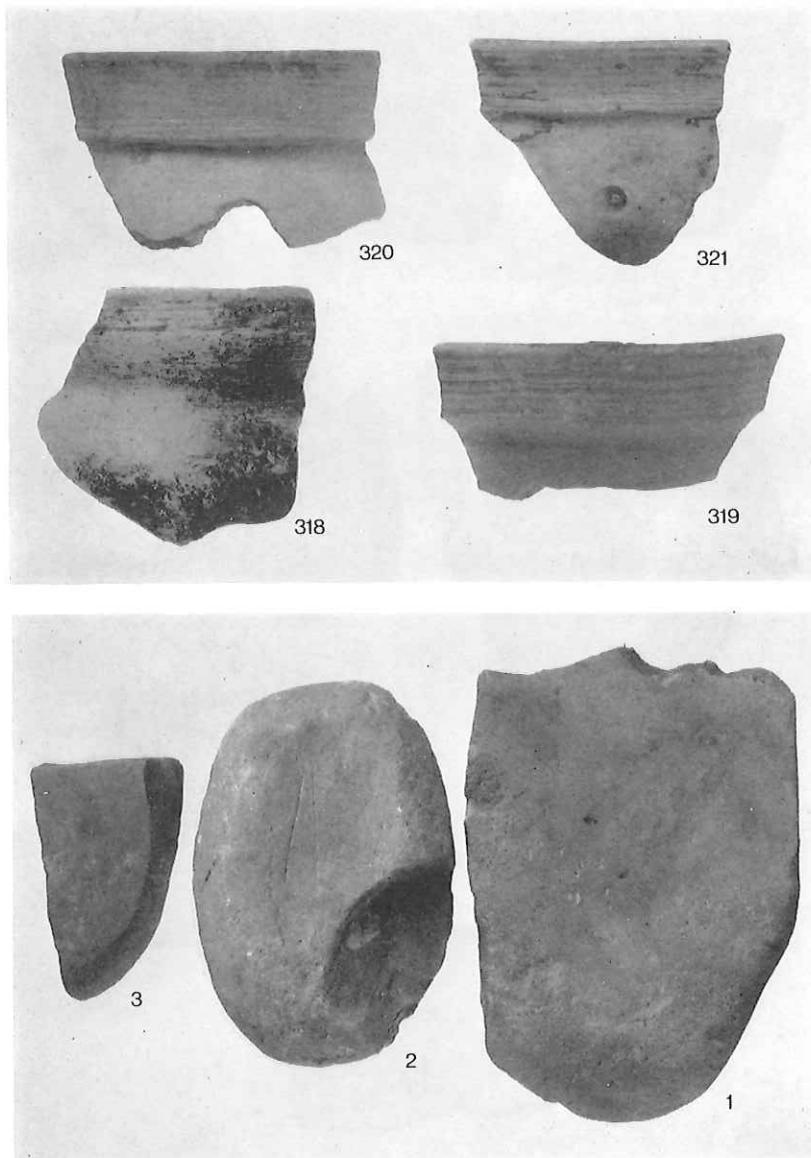


写真27 石器



写真28 須恵器

12 長持形石棺

所在地 出石町内町家老屋敷内に、長持形石棺の小口側石と蓋石、魚屋区本覚寺境内に蓋石が保存されている（図57）。

家老屋敷内にある小口側石は、昭和40年代の前半、出石城本丸内にある稻荷神社境内の隅にあったものを家老屋敷内に移転したものである。

同蓋石は、かつて、魚屋区の川島九造氏が出石高校裏山にある入佐山から発見されて先生や学校の人々とともに弘道小学校の中庭に移したと伝えられるものである。^注その後小口側石と同じく家老屋敷に移したものである（図58）。

本覚寺境内の蓋石は1963年（昭和38）ごろ、田結庄、西岡辰蔵氏宅内にあり、手水鉢の台石として用いられていたが、西岡氏の大坂転出に際して菩提寺である本覚寺境内に移されたものである（図58左、写真31）。

家老屋敷内の小口側石は上縁が蒲鉾形を呈するもので、中央に並列する方形突起がある。外面には赤色顔料が塗られ一部残っている。縦111cm、横96cm、厚さ19.5cm、方形の突起は、右が縦16cm、横17cm、左は縦14cm、横14cm、突起部の長さは、4.5～5.0cmをはかる（図58右、写真29・30）。

また、本覚寺境内の蓋石の破片はちょうど隅の部分にあたり、外面には4か所に格子状彫刻が行われている。内面には長側石と小口側石とを組み合わせができるように溝を掘っている。残存部分の大きさは、縦107cm、横57cm、厚さ33cm、格子の彫り込み部分は縦48cm、横21cm、深さ0.2cm



図57 長持形石棺遺材の変転

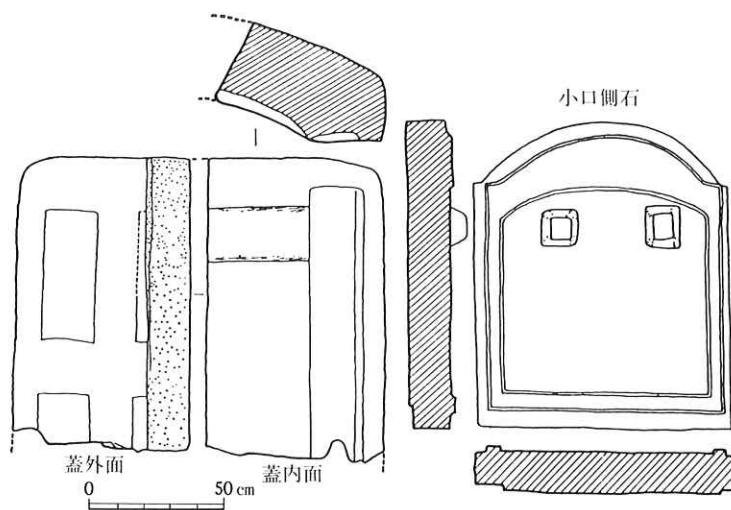


図58 長持形石棺遺材 (『日本の考古学』IVより)



写真29 小口側石 (家老屋敷)



写真30 蓋石断片 (家老屋敷)



写真31 蓋石（本覚寺境内）

構成され、それぞれの石に溝を掘り、底石の上に4枚の長側石、小口側石をはめ込み、組み合わせて蓋石を置くものである。長側石の両端、蓋石の側面に繩掛け突起と呼ばれるつくり出しを設けている。小口側石には方形の突起をつけたり、蓋石の上面には格子状の彫り込みを施すなど4世紀後半から5世紀中頃にかけて用いられた石棺の一種である。

この長持形石棺は、全国に今のところ約50基発見されている。その半数近くが、大和・河内・和泉・摂津・山城の畿内五か国から出土し、その中でも、特に大和・和泉・河内に集中している。そしてこの石棺は、大和・宮山古墳（御所市）、河内・津堂城山古墳（藤井寺市）、松岳山古墳（柏原市）、誉田墓山古墳（羽曳野市）、和泉・大山陵古墳（伝仁徳天皇陵）などの巨大前方後円墳に埋葬された大王の柩として畿内、特に河内を中心とする倭の五王の時代に使用されたものと考えられている。

兵庫県下においては11基の長持形石棺があり、たとえば播磨国には、県下第3位の規模をもつ姫路市・壇場山古墳（前方後円墳、全長140m）、第4位

をはかる。

格子状彫刻をした蓋石の例としては、兵庫県加西市玉丘古墳例、奈良県宮山古墳例、大阪府津堂城山古墳などがある。

小口側石と蓋石は蓋石に彫られた組み合わせ用の溝穴と小口側石の幅とが一致すること、また石材は間壁忠彦・間壁葭子氏の研究によると、竜山石と呼ばれる加古川下流域産の流紋岩質凝灰岩（流紋岩）を石材としていることから三者が同じ石棺の遺材であったと推定することができる。

そもそも長持形石棺は、蓋石・底石が各1枚、長側石2枚、小口側石2枚の計6枚の板石をもって

の加西市・玉丘古墳（前方後円墳、全長 105m）・山伏峠例（蓋石）、姫路市壇場山古墳前方部例（長側石断片）、壇場山陪塚例（小口側石）、山の越古墳例（方墳、56m）、小林地蔵堂例（底石？）、阿弥陀地蔵堂例（底石？）、丹波国には、県下第2位の篠山町・雲部車塚古墳（前方後円墳、全長 143m）、但馬国には、1974年（昭和49）に発見された和田山町・高田例（蓋石）がある。

これらの古墳の内いくつかは、県下においてその地方を代表する前方後円墳であることから、被葬者は当然地方におけるもっとも有力な人物と考えることができる。

このような古墳に対して、小さな墳丘内に平たい石を組み合わせた石棺、いわゆる組み合わせ式石棺を埋葬した田多地3号墳を例とする古墳が点在している。副葬品の量、内容、古墳の規模、集団性などから在地性のきわめて強い墓制として理解されている。

組み合わせ式石棺として豊岡市陰産の陰石を利用した石棺と玄武岩を利用した石棺がある。陰石を用いた例として出石町田多地3号墳、豊岡市倉見山・正法寺七ツ塚・納屋ホーキ古墳・カチャ古墳、日高町羽根山古墳などがある。また、豊岡市玄武洞などで見ることのできる玄武岩を利用したものに、田多地3号墳第6主体、城崎町稻荷裏山古墳などがある。このように、陰石、あるいは、玄武岩を使用した組み合わせ式箱式石棺が一般的に使われているのに対し、この長持形石棺だけは、加古川下流域に産する竜山石を用いている特異性は注目していかねばならない。

長持形石棺の遺材については、いつごろ、どの古墳から出土したのかまったく分かっていない。小口側石の中央に2個の並列する方形突起をつくりだしていること、蓋石には格子状彫刻が行われているなど、きわめて典型的なものである。長持形石棺の定形化が進み展開期にさしかかる古墳時代中期中葉のころの製作であろうか。

長持形石棺を埋葬した古墳は巨大な前方後円墳が多く、王者と呼ぶのにふさわしい内容と規模を備えている。出石町を中心として、北但馬最大の前方後円墳が5世紀代に造られていたと考えることは容易であり、今後この古墳に関するさまざまな資料を収集して研究を進めていかねばならない。

注：出石高校郷土史研究会「以都之」I 1950年

13 茶臼山古墳

所在地 茶臼山古墳はかつて郷研1号墳と呼称され、出石町谷山字ムクダニに位置する。有子山と入佐山の谷間を流れる谷山川が、古寺山塊から流れ

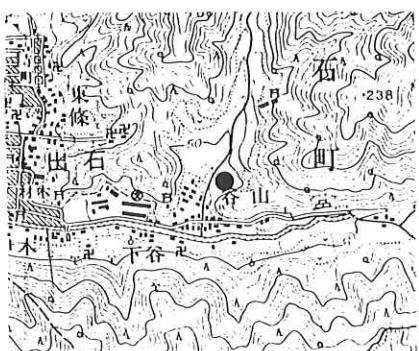


図59 位置図

出る揚枝谷川と合流する谷山の集落北方、揚枝谷川左岸にある。

付近の遺跡としては、鶏塚古墳、入佐山古墳群がある（図59）。

茶臼山古墳は、明治10年代、墳頂部を耕作中、石室の一部が破壊され、人骨、刀が出土した。その後ただちに埋めもどされたと伝えられている。その状況から竪穴式石室と推測され、現在石室の石材

の一部が墳丘上に残っている。1972年（昭和47）、武庫川女子大学考古学研究会により測量調査が行われた（図60）。

茶臼山古墳は東から西に伸びる緩やかな丘陵を切断して独立丘とし、円形に形を整えて墳丘としている。直径約49m、古墳の周囲には、幅約15m程の周濠くわうがめぐり、三段築成の円墳である。墳丘の規模から但馬では最大規模の円墳である。墳丘上からは、円筒埴輪の破片が採集されている（写真32）。

周濠は、南北にやや水平で、東から西へ約比高差3mをはかる。墳丘の東側および南側部分は現在水田となっている。約3mの高低差のため常時濠内に水が湛水たんすいしていたかどうか不明である。

石室の石材と考えられているものは、墳丘の二段目、南斜面にある。大きさは、縦約1.3m、横約0.4m、厚さ33cmをはかるものである。

遺物

埴輪（図61）

茶臼山古墳から採集された埴輪は円筒埴輪がほとんどであり代表的なもののみ図示した。他に朝顔形埴輪や形象埴輪はない。円筒埴輪片は全体の形を復原する程の資料はなく、細片にすぎない。円筒埴輪は、その焼成によって2つのグループに分けられる。1は赤褐色に焼けた埴質の埴輪である（1・3・

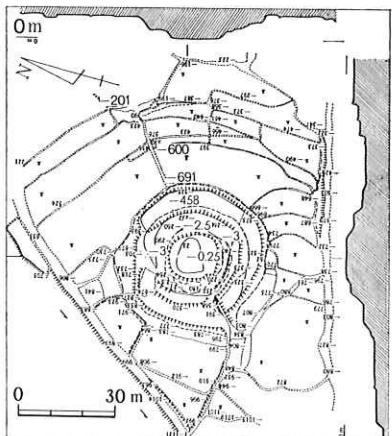


図60 茶臼山古墳実測図



写真32 茶臼山古墳（南から）

5・6)。2は灰色、あるいは灰色に近く、非常に堅い須恵質の埴輪(2・4・7)である。

埴輪は粘土紐を巻き上げて成形している。外面には横ハケメを基本的な調整技法として用い、突帶の接合部分などには下地として縦ハケメを施したのち、突帶接合後、横ハケメ調整を行っている。突帶はM字形をするがあまり高くない。内面は縦ハケメを施し、接合部分等は指ナデによって調整が行われている。焼成は堅牢である。透かし孔等については資料がない。両者共に焼成の仕方が異なるが成形、調整技法は同じである。

但馬地方における埴輪をもつ古墳、あるいは出土例は18か所確認されている。円山川上流域の和田山町池田古墳、小盛山古墳、長塚古墳、城ノ越古墳、宮町出土例、山東町森向山開墾地出土例、柿坪～和賀間出土例、喜多垣芝の段出土例、大月向山出土例、養父町上野1号墳、観音塚古墳、養父町内出土例、下流域では、日高町馬場ヶ先古墳、城崎町スクモ塚、小見塚、大神古墳、出石町入佐山古墳と本古墳とである。

その中でも須恵質の埴輪を出す古墳としては和田山町長塚古墳がある。

須恵質の埴輪の出現は、地方における須恵器生産とのかかわりの中で見ていかねばならない。言い換えれば、須恵質の埴輪を焼成するためには窯を採用した可能性が高く、従来の弥生土器や土師器を焼成していた窯による埴

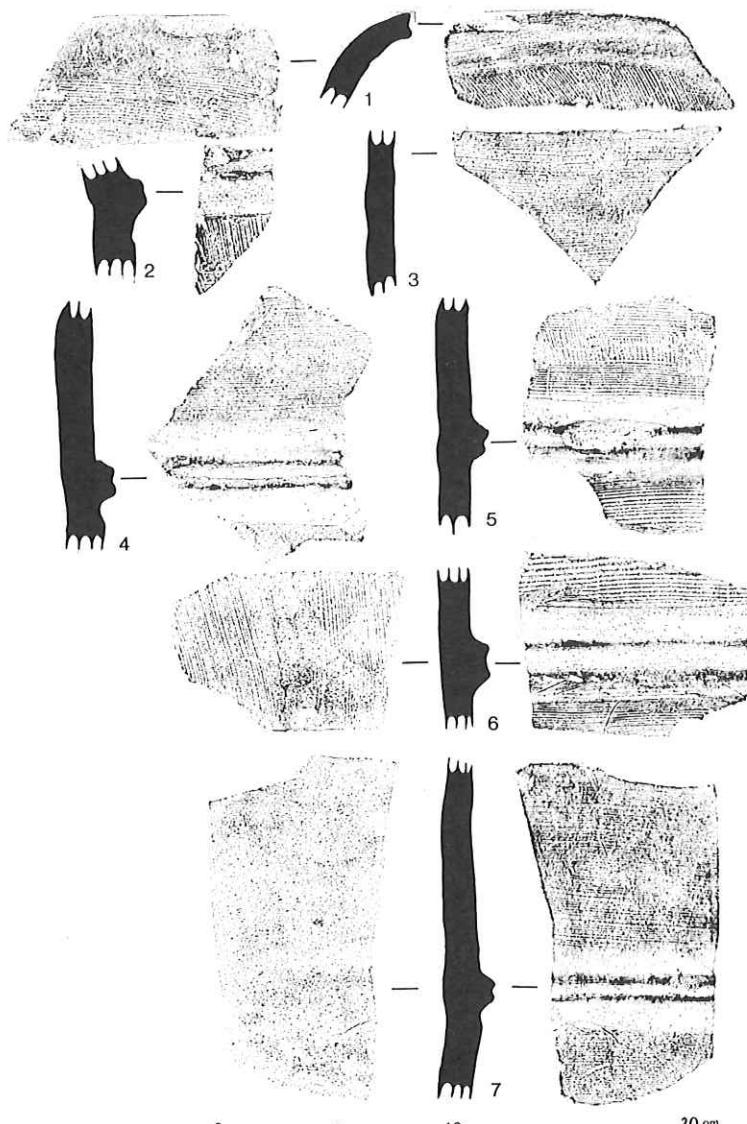


図61 墳輪（拓影）

輪生産がしだいに須恵器用の窯で焼成を始めたと推測することができる。それは何によって検証されるかと言えば、明らかに須恵質の埴輪が出現していること。須恵器と共に埴輪を焼いた窯があること、埴輪の内面に須恵器の調整技法である青海波文の叩き目により調整が行われていることから言える。^{注3}その年代は春成秀爾氏の円筒埴輪の編年によると第IV期の5世紀中ごろから後半にかけてであり、その論を援用すると茶臼山古墳出土の埴輪は一部窯で焼成された可能性が考えられる。

また、但馬におけるもっとも古い須恵器を焼いた窯は竹野町鬼神谷窯跡である。^{注4}陶邑古窯址の編年によると6世紀前半に製作年代が求められるTK 23・47型式に比定する。

このことは、但馬地方における須恵質の埴輪と須恵器の製作時期に差があることとなり、この時間の差を今後の問題とすべきであろう。

古墳の築造時期は埴輪から推測するならば5世紀後半に位置付けられるものであろう。

茶臼山古墳出土の円筒埴輪は出石高校に保管されている。

注 1. 出石高校郷土史研究会「以都之」II 1950年

注 2. 武庫川女子大学考古学研究会「茶臼山・鶏塚古墳測量報告」1978年

注 3. 春成秀爾「埴輪」『考古資料の見方』《遺物編》1977年

注 4. 田辺昭三「陶邑古窯址群I」平安学園考古学クラブ 1966年

14 鶏塚古墳

所在地 出石町谷山612番地に所在し、八坂から流れ出る谷山川が谷山の集落へ入る平地に立地している。地目は畠である(図62)。

付近の遺跡としては、茶臼山古墳、入佐山古墳群がある。

1917年(大正6)5月20日、古墳の上にあった大木が倒れ、その下に穴があいたことにより発見された。その時、須恵器(6個)^{注1}および破片、水晶玉、刀、鏡等が発掘されたと言われている。1972年(昭和47)、武庫川女子大学考古学研究会による測量調査が行われた(図63)。

その結果によると、古墳は土取り等により削り取られ著しく変形している。現状では直径約25m、高さ3mの円墳である。墳丘上には稲荷を祭る小さな祠があるほか埴輪等の外部施設はない。石室は横穴式石室である。南西方向

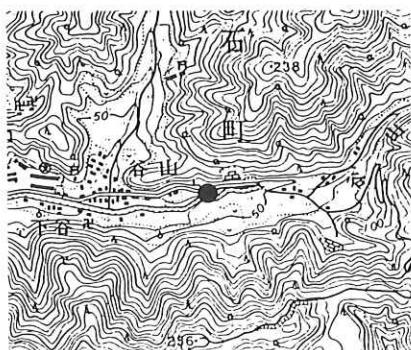


図62 位置図

管玉(1)・鉄劍(1)・鉄斧(1)・刀子・杯一括・高杯(1)・憩(1)・轡(1)・鎧鎖一括・
鉄鎌一括が保管されたことになっているがその所在については不明である。

これらの出土遺物から推察して、発見時には横穴式石室に土砂が堆積していなかったと思われ、副葬品が床面に埋置されていたのであろう。鏡・剣・玉・馬具・須恵器などの遺物の在り方から古墳の築造年代は古墳時代後期中ごろの6世紀後半に位置するものであろう。

注 1. 出石高校郷土史研究会「以都之」II 1950年

注 2. 武庫川女子大学考古学研究会「茶臼山・鶴塚古墳測量報告」1973年

注 3. 東京国立博物館「東京国立博物館収蔵品目録」1956年

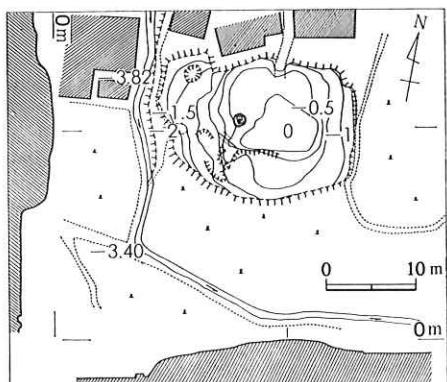


図63 鶴塚古墳実測図

に開口し、石室の奥壁は祠の後ちかくに位置している。現在石室内には土砂が入っているため中に入ることができない（写真33）。

1956年（昭和31）に刊行された
^{注3}「東京国立博物館収蔵品目録」によると、1917年に出土した遺物は、東京国立博物館には、乳文鏡片(1)・雲珠片一括・砥石(1)が保存されている他、地元には、切子玉(7)・
はそう くつう 磐(1)・轡(1)・鎧鎖一括・
鉄鎌一括が保管されたことになっているがその所在については不明である。

これらの出土遺物から推察して、発見時には横穴式石室に土砂が堆積していなかったと思われ、副葬品が床面に埋置されていたのであろう。鏡・剣・玉・馬具・須恵器などの遺物の在り方から古墳の築造年代は古墳時代後期中ごろの6世紀後半に位置するものであろう。



写真33 鶴塚古墳（南から）

15 入佐山1号墳

所在地 出石町下谷、出石高校の裏にそびえる標高70~90mの入佐山、俗称「弘法山」の頂上に位置する。入佐山古墳群は入佐山1~3号墳からなり、

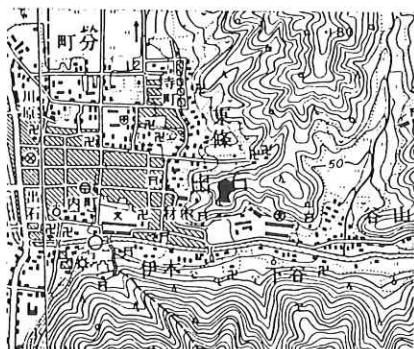


図64 位置図

1号墳は前方後円墳、2・3号墳は円墳である。現在、1号墳は後円部を北に、前方部を南にとする全長44m、後円部径24m、前方部幅18m、後円部の高さ4m、前方部の高さ2.5mをはかる。^{かき}葺石等の外部施設は見られない。古墳群の盟主的位置を占める古墳といえる(図61)。

付近の遺跡としては、茶臼山古墳、鶴塚古墳などがあり、入佐山

1号墳の後円部上には入佐山経塚が造られている。また、家老屋敷の前庭に保存されている長持形石棺の小口側石、長側石はここより移されたと伝えられているが真実はよく分からぬ。

明治時代の終わりごろ、後円部より家形埴輪・鉄器・大きな甕等が出土したと伝えられ、大正時代、地藤重と展望台設置のために破壊されたが、現在、後円部が前方部よりも高く、くびれ部分などにわずかに墳形をとどめている。

遺物

家形埴輪(図65、写真34)

家形埴輪は4点ある。破片の内3点は接合するため、厳密には2点である。これらの破片は調整技法、胎土、焼成、色調等から同一個体と考えることができる。埴輪片を見ると、戸口を表した方形の「透かし孔」があり、平地式であるところから、家形埴輪の破片であると考えられる。埴輪片は屋根の部分をはじめ住居の5分の4程が欠けている。そのため屋根の構造が破片から切妻造りか入母屋造りか即断することはできない。

1. 家形埴輪片

家形埴輪の下部、側面に位置する破片と思われるが明らかでない。上方に橢円形の透かし孔が開けられている。埴輪の中位に水平に突帯を貼り付けて

いる。

器面の調整は台形の突帯を挟んで、下はさまざまな角度からのハケメ、ナデ、上はヨコナデを施している。内面は上方にのみ斜行するハケメが施され、他はナデが行われている。床部分等の痕跡は何も残っていない。

残存部分の長さ基部で 18.4 cm、基部からの高さ 11.1 cm、基部から突帯までの長さ 6.1 cm、基部の厚さ 2.3 cm をはかる。

2. 家形埴輪片

1 と同様、家形埴輪の下部の破片であるが、残存している長さから正面に位置するものと思われる。上部が欠損している。埴輪の中位に右下がりの台形の突帯が貼り付けられている。突帯の上下は強く指頭で粘土をなで付けている。

埴輪の成形には粘土紐を積み上げている。器面の調整は、突帯を挟んで、下方はナデ、上方は斜行するハケメが施される。内面はさまざまな角度からナデ、ハケメが施される。床部分等の貼り付けた痕跡は何も残っていない。

残存部分の長さ 22.9 cm、基部からの高さ 12.4 cm、基部から突帯までの高さ 6.1 cm、基部の厚さ 1.8 cm をはかる。

3. 家形埴輪片

家形埴輪の正面右端に位置する破片である。基部から屋根近くまで残り、方形の戸口が設けられている。戸口に平行して、垂直に一条の線刻があるが、戸口部分の木枠を表現しているのであろうか。突帯は基部近くに水平に貼り付けているが剝離している。

器面の調整は全体を斜行するハケメをさまざまな角度から施したのち、縦横のナデを加えている。内面は表面と同様のナデが施される。床部分の痕跡等は何も残っていない。

残存部分の長さ基部の所で 16 cm、基部からの高さ 22.8 cm、基部から入口までの高さ 6.0 cm、基部の厚さ 1.9 cm をはかる。

入佐山1号墳はその実態についてあまり明らかではない。古墳の墳形、規模等について若干分かり始めたが、内部構造等について何も知ることができず、ただ、前方後円墳であり、家形埴輪を有する古墳であるという事実のみである。埴輪からこの古墳の築造年代を推論すると 5世紀後半から 6世紀初頭に位置付けられるものであろうか。

注. 出石高校郷土史研究会「以都之」 I 1950年

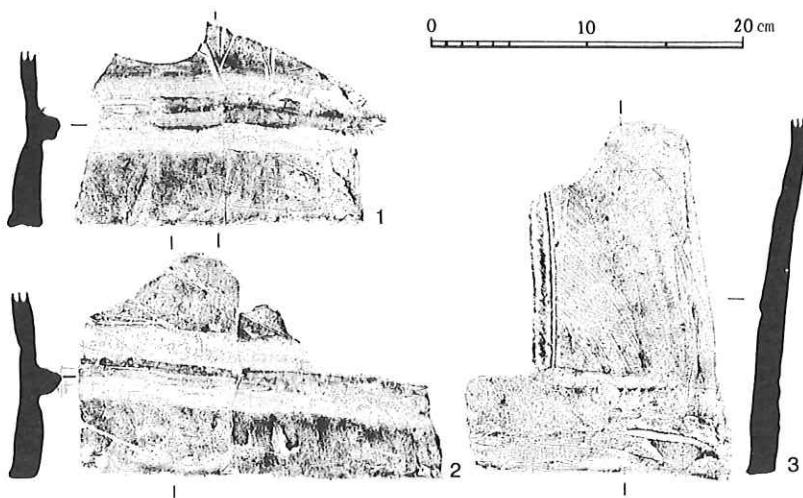


図65 家形埴輪（拓影）

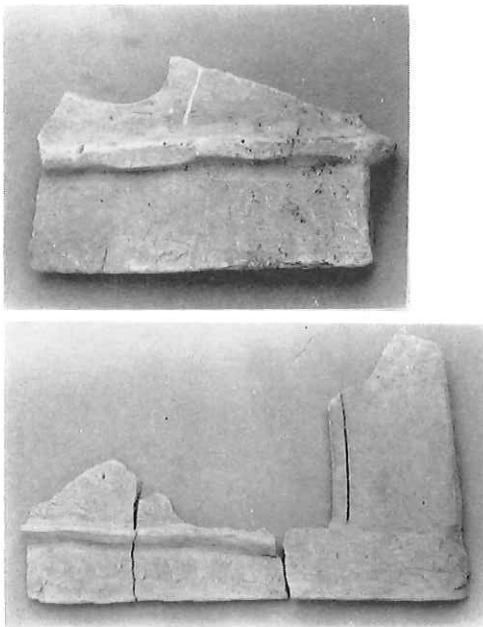


写真34 家形埴輪

16 田多地古墳群・経塚群

所在地 出石町田多地字中通りに所在する。出石町と豊岡市との境界線に近く、標高 50~60m の丘陵上に位置する（図66）。



図66 位置図

1970年（昭和55）12月11日、豊岡市教育委員会の潮崎誠氏が土取りにより削られた崖面に経塚を発見した。潮崎氏から連絡を受けた出石町教育委員会は、県教育委員会に連絡すると共に指導をあおいだ。県教育委員会から専門技師が派遣され、12月17日、崖面に露出している経筒を一時石室から取り出し保存を行った。その後、出石町教育委員会が事業主体となって、緊急発掘調査が実施される運びとなった。

1981年（昭和56）3月2日発掘調査を開始したところ、経塚は古墳の墳丘上に築かれていることが判明し、急ぎ古墳の調査も含めて経塚の調査が行われた。この報告は、森内秀造他「田多地古墳群・田多地経塚群Ⅰ」出石町教育委員会1980年の抜粋である。

田多地3号墳（図67・68）

田多地3号墳は東西に伸びる尾根の稜線上に築かれている。稜線の北側は土取りによって失われ、墳丘も半分程度消滅している。

墳丘の西側は稜線を南北方向に切って、幅約3.5mの掘り割りを設けている。東側は西側のように明確な掘り割りはないが、4号墳の西斜面裾部には南北に走行する幅30cm程度の溝が設けられ、3号墳と4号墳の両墓域を区画しているようである。墳丘の規模は東西30.1m、南北については北側半分が失われており、墳丘の南側半分が約6m程度残されている。

主体部は墳頂部だけでなく、墳丘の裾部や墳頂から約5~6m東に下った平坦地に設けられており、墳丘内から合計15基の主体部が検出されている。内訳は石棺3基、木棺なしし土壙墓が12基である。

第1主体（図68）



図67 田多地・安良古墳群分布図
いたと推測される。

第1主体は長軸を南北方向にとる木棺墓と判断した。検出された墓壙は南端小口部と推定される。出土遺物は内行花文鏡以外については認められなかった。

第2主体（図69・97、写真36左上）

墳丘のほぼ中央に位置する。主軸を東西方向に置く、第2主体部の南には第4主体が設けられ、掘り方の一部がわずかに切りあっているが、前後関係は分からぬ。

掘り方は2段になっており、中央部に木棺を納めている。棺内の中央、約1.60mの範囲にわたって、底面および側面に赤色顔料の痕跡が認められた。

遺物は鉄製 鍔やりがんなが3本出土している。29は棺の上面から出土しており、棺外に副葬されていたようである。残りの2本は棺の底面から出土している。

第3主体（図70・97、写真40左上）

第2主体の掘り方の西南隅を再び掘り込んで組み合わせ式箱式石棺を設けている。石棺は第2主体と同じく、主軸を東西方向に置いている。

3号墳墳頂西よりの崖面際で検出された主体部である。遺構は墳丘崖面線に沿って残存しており、東西方向に1.33m、南北に0.40mの墓壙が検出された。墓壙の深さは、墳丘の地山検出面より0.40mであった。墓壙西端部は第2主体の墓壙により削られていた。

墓壙検出の端緒は、表土層を剥いでいたところ、鏡を検出したことによる。この内行花文鏡は鏡面を南に向け、ほぼ垂直に立った状態で検出された。鏡の検出位置は、墓壙の中央部の崖面際にあった。鏡面の向きや出土位置等の状況から見ると棺内小口部に立てかけていたと推測される。

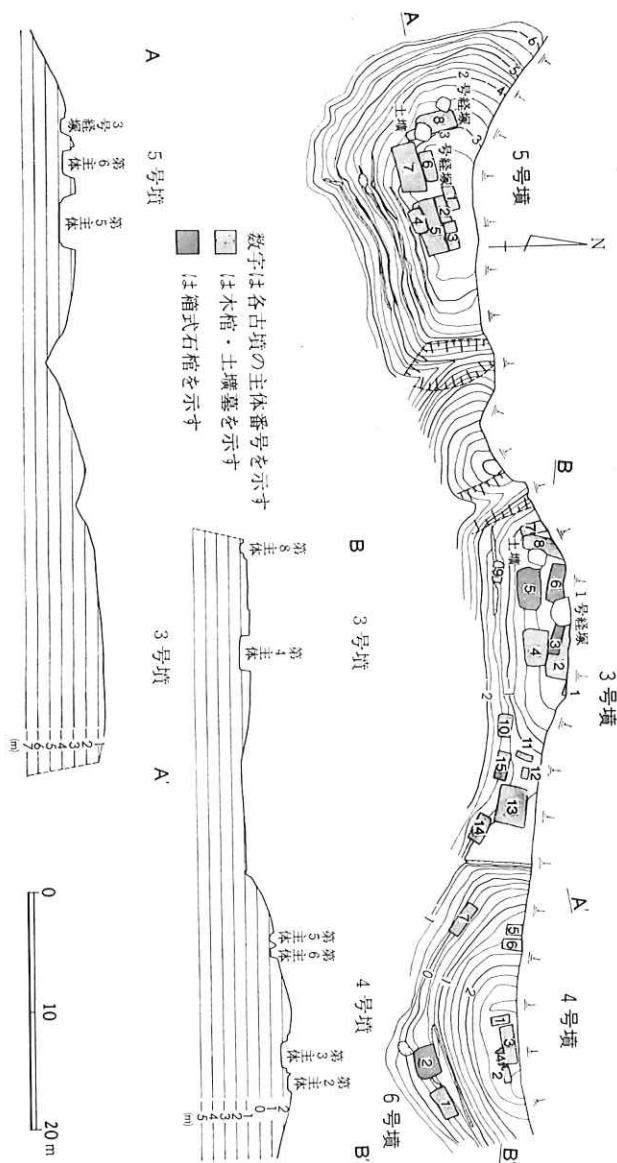


図68 田多地3～6号墳墳丘測量図

蓋石は厚さ7cm前後の板石を3枚用いている。埋土が棺内部に流入するのを防ぐため、蓋石と蓋石のすき間をさらに板石で覆っている。

石棺の大きさは内法寸法で、 $1.57\text{m} \times 0.27\text{m}$ で、高さ約0.17mである。側石は左右2枚ずつ、小口石は前後に1枚ずつ、厚さ7~8cm前後の板石を用いている。小口石はいずれも側石の両端から10cmほど内側に立てている。小口石の外側は粘土で固め、さらに厚さ3cmほどの板石で粘土を押さえ付けている。

石棺の石材は、陰石と呼ばれる流紋岩を利用しておらず、石材加工時のノミ痕が明瞭に残っている。石棺内部には、埋葬方向を異にする2体の人骨が納められていた。頭を東に向けて埋葬されているものを1号人骨とし、頭を西にして埋葬されているものを2号人骨とした。

1号人骨は2号人骨の上に重なっており、2号人骨の残存状況のほうが悪いことから、1号人骨は2号人骨の埋葬後に追葬されたものと思われる。京都大学の池田次郎博士による人骨鑑定の結果、1号人骨が女性で壮年期後半、2号人骨が男性で壮年期前半ということである。遺物は棺内からは出土していないが、棺外から鉄器(22)が1点出土している。

第4主体(図71・96、写真37上・38左下・右下)

墳丘の中央部より、やや南に下がった斜面にある。主軸は東西方向に向く。主体部は割竹形の木棺にあると思われる。木棺の長さ3.02m、小口幅0.9mである。掘り方の上部から土師器が出土した。土師器は壺(7)と甕(6)である。壺は半載されており、甕の蓋として用いられている。

第5主体(図72・97、写真36左下)

墳頂平坦面の南端に位置する。主体部は組み合わせ式の箱式石棺である。箱式石棺は、板状に加工された流紋岩の石材を組み合わせたものである。蓋石はほぼ正方形に近く、厚さも同様な4枚の板石で構成されている。その上をすき間をふさぐように15枚の薄い板状の石材が覆っている。石棺本体は、各小口石1枚、各側石5枚で構成され、側石の一部は2段に積まれている。なお、蓋石・側石・小口石を補強するかのように41枚の板状の石がまわりを押さえている。全部で72枚の石材を用いて石棺が構築され、石材のすき間に黄色の粘土が詰められている。箱式石棺の規模は、内法で長さ1.66m、頭部幅0.38m、脚部幅0.27m、深さ0.34mをはかる。

石棺内は、流入土もなく、側石の1枚が倒れ込んでいただけである。棺内には、人骨が認められ、頭蓋・骨盤・下肢骨等が残存していた。また、頭蓋骨直下において、鉄製の鉈(25)が1本出土した。棺内の出土遺物は、この鉈1本のみで土器類は全く認められなかった。

第6主体(図73・97、写真36右下)

第6主体は3号墳墳頂部の西よりに位置し、長軸を東西に向けた組み合わせ式箱式石棺である。石棺はこの地方で産する玄武岩で構築されている。棺側壁は一辺20~30cmの、5~6角形の柱状の石材の側石、もしくは小口面を利用して構成されていた。蓋は5枚の板石を架構しており、さらに接合部上には5枚の板石を架けている。石材のすき間には粘土等の充填材は認められなかった。側壁外面には蓋石架構後に、厚さ15~20cmの割石を側壁に沿って一列に蓋石とほぼ同じ高さにまで積み上げている。

床面には人骨が良好な状態で遺存していた。人骨の頭部から腰骨にかけては赤色顔料が付着していた。頭骨の下には7×10cm、厚さ1cmの小石をはじめ4片の小石が置かれていた。その他にも腰骨部から下肢骨にかけて床面にも9片の小石が置かれていた。副葬品については腰骨部上に切先を足先に向かって切った状態で鉄剣(32)が出土している。

第7主体(図76)

墳丘の西側斜面に掘り込まれた木棺直葬墓である。主軸は南北方向に向く。北側が土取りによって削られてしまっている。墓壙は二段墓壙となり、掘り方の西側の一部は第8主体に切られている。遺物は出土していない。

第8主体(図76)

第7主体の掘り方の一部を切ってつくられている。棺は検出できなかったが、おそらくは木棺であろう。遺物は出土していない。

第9主体(図77)

墳丘の南斜面裾部につくられていた。木棺直葬と思われる。棺そのものは検出できなかった。主軸は東西方向に置いている。遺物は出土していない。

第10主体(図78・97)

墳丘の南斜面裾部につくられており、主軸は東西方向に置いている。

木棺の大きさは長さ1.61m、小口幅は0.32mである。遺物は棺内から鉄器(28)が1点出土している。

第11主体（図74）

墳丘の中央平坦部より、やや東に下った緩斜面にある。主軸は南北方向に置いている。遺物は出土していない。

第12主体（図75）

墳丘中央平坦部から、やや東に下った緩斜面にある。主軸を東西方向に置く。木棺の痕跡は検出されなかつたが、木棺墓になるか、土壙墓になるかは分からぬ。遺物は出土していない。

第13主体（図81・97、写真39下）

3号墳の東端、墳丘の高まりからはずれた尾根鞍部に位置する。^{あん}

墓壙は、地山を平坦に成形した後に掘削しており長軸をほぼ東西に向けている。上面から底までの深さは1.24mで底はほぼ平らに仕上げている。棺の西約3分の1にわたって赤色顔料が広がっている。

箱式の木棺直葬墓と思われるが、埋土、赤色顔料、遺物出土状況から見ると、墓壙よりもひとまわり小さい長さ2.25m、幅0.75mの棺を埋置したものと推定される。

遺物は鉄製の剣（34）、斧（23）及び管玉（41-9）が出土している（図97・98）。剣は棺中央、南側板に沿って出土しており、切先を東に向けた状態であった。袋状鉄斧は、西小口に寄った位置の赤色顔料から近接して出土している。これらよりやや南寄りの、やはり赤色顔料中から曲玉1個・管玉8個が集中して出土している。

第14主体（図79・97・98、写真38左上・39下）

尾根鞍部の南に向かって傾斜する斜面に立地する。墓壙の平面形態はやや隅円の長方形であり、規模は長軸方向である。主体部は、箱式の木棺直葬墓と思われ、西に頭位を置くものと思われる。

遺物は鉄剣（33）・玉類（42）が出土している（図97・98）。剣は切先を東南方向に向けて出土している。また、曲玉1個・管玉20個は北側板の中央やや西よりに集中して出土している。

第15主体（図80）

第13主体の西南に、同主体と東西の角を近接させて、南向きの斜面上に立地する。

棺の痕跡は確認できなかつたが、墓壙の形態から箱式の木棺が直葬されて

いたと推測される。副葬品は見られない。

田多地 4 号墳（図67・68）

4 号墳は 3 号墳の東、調査範囲中の東端を占める。墳丘は地山整形によって一部形づくかれているが、自然の起伏を利用したものである。

墳丘西側は南北にカットし、その下に幅約 20cm、深さ約 10cm の溝を南北に走行させて墳丘裾を形成している。同じように南東方向でも地山を平坦に整形した後、幅約 30cm、深さ約 15cm の溝を 9.3m 挖削して 6 号墳との境界を明示している。

主体部は合計 7 基検出した。内容は木棺直葬墓が 4 、組み合わせ式箱式石棺墓 1 、土壙墓 2 である。これらは墳丘頂部平坦面に立地するものと、墳丘斜面に立地するものにグルーピングすることが可能である。平坦面立地のものは割竹形木棺を内容とする第 3 主体を中心として、小形の土壙墓・石棺墓が近接して配されている。斜面立地のものでは、第 5 主体と第 6 主体は近接しているが、第 7 主体は単独で存在している。第 7 主体は盛土を必要とする構造であるため、更にその独立性は高まる。

遺物は第 4 主体からガラス小玉、鉄製刀子が出土している。また墳丘表土層からは、鼓形器台破片、砥石が出土している。

第 1 主体（図82）

墳丘の中央平坦部の西寄りにつくられ、南北方向に主軸をとる。木棺は痕跡が確認できなかった。遺物は出土していない。

第 2 主体（図83）

墳丘の中央平坦部の東寄りに設けられ、第 4 主体のすぐ東に立地する。主軸は東西方向に置く。第 1 主体と同じく、木棺直葬であろうと思われるが、その痕跡は検出できなかった。遺物は出土していない。

第 3 主体（図84）

墳丘平坦部のはぼ中央部につくられている。主軸は東西方向に置かれている。遺物、赤色顔料は検出していない。

第 4 主体（図84・85・97・98、写真38右上・39下）

第 3 主体の掘り方の東南隅の一部を切ってつくかれている。内部主体は石棺である。石棺の石材は玄武岩を用いている。石棺の蓋は基本的には、3 枚で、蓋石と蓋石の間にできるすき間を更に小さな石で覆っている。東の小口

は特に玄武岩の小片で蓋石のまわりを囲んでいる。

石棺の大きさは $0.73 \times 0.18\text{m}$ 、深さ 0.16m で、非常に小型である。小口石は前後 1 枚ずつである。側石は左右とも 3 枚である。

遺物は棺内の東の小口周辺から、ガラス小玉 31 個 (43) と刀子 (21) が 1 本出土している。ガラス小玉は連なっておらず散乱していた。

第 5 主体 (図86)

墳頂からやや下った西斜面に位置し、長軸方向はほぼ南北を向く。墓壙は隅円方形を呈する。棺の痕跡は確認できなかったが、墓壙の形状から見ると割竹形木棺を直葬していたものであろう。

第 6 主体 (図86)

墳丘西側の斜面に第 5 主体と約 30cm の距離をもって平行して位置している。墓壙底には、両側壁に沿って溝が掘られ、両小口壁にまで及んで切り込まれており、箱形の木棺の長側板を支える施設と考えられる。

第 7 主体

墳丘の西南斜面裾部に位置する。主軸方向は等高線に沿っている。内部主体は割竹形木棺直葬と思われ、2 段目の掘り方は棺を安定させるための施設と考えられる。

田多地 5 号墳 (図67・68)

尾根上に立地する古墳のうち、最も西寄りに位置する古墳である。この古墳を頂点として、北西に延びる尾根と南西に延びる尾根とに分かれる。

墳丘の東側は稜線を南北方向に切断して、V 字形の掘り割りを設けている。墳頂部と掘り底の比高差は約 2.70m ある。

墳丘の規模は、東西については 25.3m で、南北については、墳丘の北半分が土取りによって失われて不明である。墳丘の中央部はほぼ平坦である。形態的には方形墳に近い。

墳丘は 3 分の 1 以上失われているにもかかわらず、8 つの主体部が検出されている。当古墳も 3 号墳・4 号墳と同じように多葬墳であり、しかも第 1 ~ 第 5 主体に見られるように主体部と主体部が切りあうこともなく、明らかに、前の被葬者の位置を熟知している。

このほかに 2 号、3 号の経塚が発見されている。

第 1 主体 (図87、写真38左中)

第2主体および第5主体の掘り方の一部を切ってつくられた木棺墓である。主軸は東西方向に置かれている。箱式の木棺直葬墓と思われる。

第2主体(図88、写真37下)

第5主体の掘り方の北西部隅を掘り込んでつくられている。主体部は木棺直葬墓である。遺物は東小口から鉄器片が出土したが、残存状況が悪く、原形をとどめていない。

第3主体(図88、写真37下)

第5主体の掘り方の北東部隅を掘り込んでつくられている。掘り方の底断面は丸くなっている、おそらく割竹形の木棺が納められていたと思われる。遺物は出土していない。

第4主体(図88、写真37下)

第5主体の掘り方の南西部隅を切り込んでつくられており、同主体に並行した長軸方向をもつ。底面は丸くなっている、おそらく割竹形の木棺が納められていたのであろう。遺物は出土していない。

第5主体(図88・97、写真37下)

墳丘平坦部の中央南寄りに位置する木棺墓である。主軸は東西方向に向く。今回、調査した木棺墓の中では、最も大きい。掘り方は2段になっている。

棺のほぼ中央部に赤色顔料の痕跡が認められ、その南側から鎧(31)が出土している。

第6主体(図89)

第6主体は5号墳の墳丘上平坦面にあり、南側辺が第7主体と接している。主軸はほぼ東西方向に置く。底は完全な水平ではなく南にやや傾斜をもつ。

主体部は、平面規模に比して、深く掘削されており、底面は第7主体とはほぼ同じレベルになる。箱式の木棺直葬と思われ、ほぼ墓壙底いっぱいに埋置されたものであろう。遺物は出土していない。

第7主体(図89)

墳丘中央の平坦部よりわずかに南西に下がった斜面上にある。主軸は東西方向を向く。

東の 小口寄りに赤色顔料の痕跡が認められたが、遺物は出土していない。

第8主体(写真38右中)

5号墳の平坦面から西寄りのやや下った位置にあり、長軸方向は5号墳等

の他の主体部とは異なり、ほぼ南北近くに置く、墓壙の両端は2・3号経塚によって切られている。

墓壙は箱式の木棺直葬墓と思われ、埋土の状態から、棺は2段目の墓壙の西側壁に寄せて埋置されていたものと考えられる。副葬品・赤色顔料は検出されていない。

田多地6号墳（図67・68）

6号墳も他の墳丘と同様、地形を利用して造営されているが、他の3・4・5号墳が東西に走行する山塊の稜線上を利用しているのに対して、6号墳はその東西の稜線から南に派生する支尾根上を利用している。

第1主体（図90・96）

4号墳との間にある段状の地山整形の直下にあり、段に沿った長軸方向をもつ。墓壙底には、船底状を呈する掘り方が設けられている。主体部は、割竹形木棺を直葬していたものと考えられ、この2段目の掘り方は、棺を安定させるための施設と考えられる。墓壙内からは、副葬品・赤色顔料は検出されなかつたが、墓壙検出時に甕形土器の破片（10）が出土している。

第2主体（図91・97、写真36右上）

第1主体の西に、ほぼ同じレベルで並んでおり、長軸方向もほぼ一致する。玄武岩の板石を利用した組み合わせ式箱式石棺が納められている。側板は、各々4枚の板石の端面を接して組み合わされており、すき間には外から更に石をあてて、土砂の流入に備えている。側板の西端の1枚だけは、両辺とも外側に重ねて組み合わされている。小口は1枚石で行っており、側石の内側に入れて組み合わされている。

蓋石は、ほぼ同じ大きさの板石4枚で構成されており、更に小さな石を用いてそのすき間を埋め土砂の流入を防いでいる。蓋石上には、大小約50個の覆石がのっているが、非常に乱雑に積まれており、棺全体を覆っているわけではない。石材も玄武岩だけでなく、塊状の山石も見られる。

棺内東よりに、頭蓋骨片が浮いた状態で出土しており、その直下から、鉄製の鉈（26）が南側板に沿った状態で出土している。本主体部は、蓋石が全体にやや南にずれて、北の側石に架構していないものもあり、蓋石の積み方も乱雑である。また、人骨の残存状況も悪く、後世になって石棺が開けられ再び埋め戻された可能性が高い。

出土遺物

1、 鏡 (写真39上)

3号墳第1主体の棺内小口部と推定される位置より出土した小形の内行花文鏡である。鏡は面径が6.7cmある。鏡背の鉢座には1条の圈線を巡らしており、その外には5弁の花文がある。花文は大きさが一定していない。5弁の花文の各頂部には朱文を1点配しており、鉢座の圈線と重なっている。花文間にはそれぞれ4点の朱文が配されている。花文の外は幅0.4cmの平行櫛歯文帯、同じく0.6cmの鋸歯文帯が巡っている。鏡面の反りは鏡縁部で0.2cmとごくわずかである。

鏡は両面ともに銹化が進んでおり、鏡背の文様も一部については不鮮明になっている。文様全体についても鮮明さがなく、铸上がり状態は不良である。

2、 土器 (図96、写真38左下・右下)

①鼓形器台

3号墳と4号墳の表土層から出土している。いずれも鼓形器台の上台部で、内外面とも磨きを施している。9は径が大きく、口縁部が大きく外反する。

②鼓形器台

3号墳の表土中から出土したもので鼓形器台の脚台になる。内面には横方向の削り痕が残る。脚台としては器高が低く、やや偏平な感じを受ける。

③高杯

口径13.2cmの高杯の受部である。脚部を欠いている。内面には磨きの痕が見られる。

④壺・甕

第3号墳第4主体から出土したものである。7は半截され、6の蓋のかわりに用いられていた。

6は、いわゆる山陰地方の二重口縁をもつ典型的な甕である。口縁端面は平坦で、端部が内側にわずかに突出している。体部外面は下から縦方向にハケ調整を行った後、上半部については、横方向のハケ調整を行っている。頸部については、横ナデにより、ハケ目を消している。器壁は薄く、体部外面全体に煤が付着している。

7は口径31.6cm、器高26cmの壺である。体部上半に最大径がある。外面はタテ方向のハケ目が見られるが、端部は小さく、ハケ目は細かい。体部

内面には粗い削りの痕が見られる。頸部には接合時の指圧痕がはっきり残されている。つくりは全体的に粗雑である。色調は朱を塗ったような赤褐色をしている。

⑤壺

6と同じく、山陰地方に特徴的に見られる二重口縁である。口縁上端部は外反し、口縁下端部もわずかに突出している。

⑥甕

4号墳第7主体から出土した甕で、体部下半を欠いている。口縁部がくの字形に外反している。頸部にまで、縦方向のハケ目が残る。内面には粗い削りの痕が残る。

⑦壺

6号墳第1主体から出土したものである。8と同じく口縁部をくの字形に外反させているが、屈曲の程度が8よりも大きく、口縁端面を平坦にしている。体部外面は縦方向のハケ調整を行った後、上半部については、横方向のハケ調整を行っている。内面については削りの痕が見られる。器壁は薄く仕上げている。

⑧鉢

3号墳第15主体から出土したものである。体部中央から内傾して口縁に統くもので、口縁端部はわずかに外反する。体部下半を欠くが、台付鉢になると思われるものである。

出土土器については、田多地小谷遺跡から一括出土している土師器と形式的にはほとんど変わりがない。田多地小谷遺跡の土師器は、畿内布留式の甕等と共に伴しており、畿内の布留式併行期、すなわち、須恵器導入以前の5世紀前半から中ごろくらいの時期に考えている。

したがって、田多地古墳群出土の土師器については、今のところ、一応5世紀前半から5世紀中ごろとしておきたい。

まとめ

田多地古墳群の特徴として、第1に、自然の地形をそのまま利用し、単に尾根の稜線を断ち切って墓域を区画しているだけである。

第2の特徴として、多埋葬墳ということがあげられる。完掘していない6号墳を除いて、各古墳とも、墳丘が半分以上失われているにもかかわらず、

3号墳で15基、4号墳で7基、5号墳で8基の主体部が検出されていたとすれば、埋葬主体の数は、倍以上に達しよう。これらの特徴から見れば、古墳というよりも、例えば、豊岡市立石墳墓群に見られるような弥生時代の集団墓の系譜をそのまま受け継いでいる。

これら多くの主体部は、その立地によって、さらに細かいまとまりをもっている。3号墳では、墳頂部平坦面に立地する第1主体から第6主体(3-A群)、墳丘西側斜面に立地する第7・8主体(3-B群)、墳丘東側平坦面に立地する第10主体から第15主体(3-C群)の3つの群に分けられる。また、4号墳では、墳頂部平坦面に立地する第1主体から第4主体(4-A群)、墳丘西側斜面に立地する第5・6主体(4-B群)に分けられる。5号墳では、第8主体が墳丘西側斜面立地である以外はすべて墳頂部平坦面に立地しているが、まとまりとして考えれば、第1主体から第5主体(5-A群)、第6・7主体(5-B群)に分けられる。

これら各々の群のなかでは、墓壙の主軸方向がほぼ一致し、また、主体部同士が重なることがなく、比較的整然と計画的に配置されている。例えば、3-C群・4-A群・5-A群・5-B群では、墓壙の長さが3m以上ある比較的大形の主体部に接して、小形の主体部が配されている。特に、5-A群では第5主体を中心にして第2～4主体を付属させてつくった感が強い。

また、3-A群は異なった石材を使用した石棺や木棺など様々な埋葬形態をもつが、比較的大形の主体部で構成されている。

3号墳第9主体や4号墳第7主体などは、墳丘裾斜面に単独で位置しており、その墓壙の構造から盛土などの埋葬手段がとられたものと考えられる。

出土遺物から見ると、全体的に副葬品は乏しいが、3-A群・3-C群に集中して出土している。また、必ずしも規模の大きな主体部に見られるわけではない。

次に、古墳の年代についてみると、土師器からは5世紀前半から中ごろの時期があたえられ、また、小型内行花文鏡も4世紀末から5世紀前半のものと考えられる。5・6号墳についての資料が乏しく、当然古墳の年代幅も考慮しなければならないが、他の副葬品とも併せて、5世紀前半を中心とする時期をあたえて大過なかろう。

1号経塚(図92、写真40右上)

田多地3号墳の墳丘を利用して築かれた経塚である。3枚の板石を組み合わせた小石室内に経筒を納め、崖面に露出した状態で発見されたもので同墳の第6主体と第2主体に挟まれた所に位置している。

経塚は、径2.20m、深さ0.86mの円形の土壙を掘り込み、土壙の底から西壁を横にくり抜いて、石室を設けて経筒を納めていた。

石室は3枚の板石を組み合わせ、1枚を奥石とし、2枚を側石としている。底には2枚の石を敷き、天井部に1枚の石を乗せている。そして、経筒を石室内に納めた後、入口を同じく板石であさいでいる。石室の大きさは、内法寸法で、幅24.0cm、奥行24.0cm、高さ20.0cmであり、経筒は奥壁に倒れかかった状態で発見されたが、埋納時は底石の上に真っすぐ立てて置いていた痕跡が残っている。

土壙の底は平坦である。土壙内の埋土中から、木炭と若干の土師器片が出土している。土師器はいずれも碗の底部で灯明皿である。

遺物（図99、写真41）

経筒（51・57）

総高27.1cm、直径12.5cmの銅合金の鋳造品である。筒部は長さ25.0cm、径12.5cmの大きさで、厚みは0.2cmである。底は銅板をはめ込み、筒身の下を少し折り曲げて留めている。

底部内面に針書きのようなものが見られるが判読できない。

経筒は被せ蓋式であり、蓋の表には、途中に段がつき、2段の階段上に盛り上がっている。

蓋のつまみは幅0.7cm、厚さ0.2cmの銅板を折り曲げて環状とした後、角を落として菱形と三角形を組み合わせた多面体をしている。つまみと蓋は蓋の内側からピン状のもので留めている。つまみのまわりには2本の闊線が巡っている。

経筒の内部には7巻の経巻が納められていたが経筒の底から約3cm程度の高さまで水がたまっており、この水につかっていた部分約7分の1程が残っていた。この経巻の内1巻だけを開いたところ、料紙の長さは230.5cmであったが、残存部分が料紙の下部、空白部分にあたるため文字はほとんど残されていない。

経巻の軸木は、長さ24.0～24.5cm、幅0.5～0.7cm、経塚出土の経巻は

一般的な細造りである。7本とも角を面取りし、5～8角形をした断面であり、それを縦割りに2分して合わせるという簡素なつくりである。

土師器 (52～56)

経塚の土壙中から出土したもので器形としては、埴あるいは皿になると思われ、上部を欠き底部のみである。

底部はわずかに高台をつくり出しているもの52・55とほとんど高台をもたないもの53・54・56がある。いずれも底部の切り離しは糸切り手法を用いている。53・56は内面に灯明皿として使われた痕跡が残っている。

2号経塚 (図93・94・100、写真40右中)

2号経塚は、5号墳の墳頂からわずかに西に寄った位置、第8主体の一部を破壊して造られている。

直径1.30m×1.10mのいびつな橢円形を呈する土壙を斜面上方で75cm、下方では40cm掘っている。この土壙の斜面上方の壁に縦・横・奥行とも50cm程の横穴を穿ち、板石をはめ込んで小石室をつくっている。石室の開口方向は、ほぼ西に向く、横穴の底も土壙底より約5cm掘り下げている。天井石は下面中央がくぼんだ石を使用しており、奥石、側石上にのる形で架構している。閉塞は一枚の板石と小塊石数個で行われており、更に20個以上の大小塊石を乱雑に積み上げて閉塞し強固なものとしている。経筒は、石室内床石上に青銅製経筒が蓋を北向きにして横倒しの状態で出土。

土壙内からは、鉄器、土師皿が出土した。鉄製短刀(89)は閉塞石の前に切先を下にして横穴にはめ込んだ状態で出土している。鉄鏺(90)は土壙床面北より出土。

遺物 (図100)

経筒 (81)

総高25.5cm、径9.8cmで筒身の高さ21.5cmの青銅製の経筒である。筒身は鋳造製で、底部は後から筒身にはめ込んでいる。

蓋は被せ蓋で、盛り蓋形式に分類され、つまみは台座付の宝珠形である。つまみのまわりには1本の圈線が巡り、さらに外側に3本の圈線が巡っている。経筒の中には経巻が塊状になっていたが、粘土化せず、文字はそのまま残っている部分もある。

経巻は朱本経である。軸木は用いておらず、経紙をそのまま丸めている。

10巻分が確認されているが、その内1巻は法華経の文字が見られる。

土師器 (82~88)

82~85は手づくねに近い手法でつくられた皿で、かなりいびつである。体部は強く横ナデしている。82には灯明皿として使われた痕跡が残る。87・88は、底部糸切りの皿である。86は大形のものであるが、皿というよりは杯に近い形である。形はかなりいびつで、体部には横ナデによる凹部がある。

刀 (89)

全長32.5cm、刃渡り23.5cmの短刀である。刃幅は約3.0cm、刃の厚さは約0.7cmをはかる。茎のほぼ中央に1か所の目釘穴^{くぎあな}が見られる。刃部、茎部双方に木質^{きしき}が残存しており、おそらく木製の鞘^{さや}に納めて埋納されたものと思われる。

鎌 (90)

全長約16cmの長頸式鉄鎌である。先端を斜めにおとしてその部分にのみ刃^{へら}を付けている。先端から約9cmで、わずかにふくらませ、段^{へだ}を付けて範代^{はんたい}に続く。刃部の断面は長方形、範代部の断面はほぼ正方形となる。

3号経塚 (図94・95、写真40左下・右下)

3号経塚は5号墳の墳頂平坦面よりやや西に下がった斜面に位置し、第6主体の西側に第8主体の東南隅を破壊して構築されている。不整形な円形土壙を掘り、その内壁に横穴を穿ち、小石室を設けて土師質の経筒を安置している。

円形の土壙は直径1.70m×1.55mを呈し、深さは斜面上方で92.0cm、斜面下方で30.0cmをはかる。小石室は土壙の東壁に、床面から高さ約60.0cm、幅約70.0cm、奥行約50.0cm程の横穴を掘り込み、板石をはめ込んで構築されている。小石室の大きさは、内法で高さ33.0cm、幅28.0cm、奥行20.0cmをはかる。小石室の入口は1枚の板石を立てて閉塞し、その両端を石で押さえている。

土師質の経筒は石室内底石上に、筒身の上半分が破損し、蓋が筒身の外におちた状態で検出された。

供献された遺物としては、土壙底面から、鉄鎌3点・鉄刀1点・土師皿5点が出土している。

鉄鎌は、小石室入口の南側の壁に立てかけてある状態で出土。5枚の土師

皿の内2枚は、土壙床面寄りに重なり合った状態で出土した。また土壙中からは木炭及び土師皿の小片が出土している。

遺物（図101）

経筒（91）

土師質の経筒である。石室の閉塞石を取り除いた時の経筒の状態は、上部が破損し、蓋が落ちて筒内部に土が混入していた。このため経筒内に納められていた。経巻は不朽してしまっていた。

経筒は筒身と蓋部は蓋本体とつまみ、つまみの台座が別々につくられている。しかも筒身は底をもたない珍しい型式の経筒である。

筒身は高さ20.7cm、径16.7cmをはかる。外面には粘土紐の巻き上げ痕が残り粘土紐巻き上げの痕跡を残している。

蓋は径16.3cmをはかり、中央に0.7cmの穴が穿孔されている。いわゆる盛り蓋型式に近いが頂部は平坦である。口縁端部は、内側に折り込まれている。

蓋の上にはつまみの台座が乗せられている。形態としては、円錐形の頂部をカットした形となる。底径9.6cm、上径4.1cm、高さは3.8cmの大きさである。中央には1辺0.8cmの四角い穴があけられている。

つまみは宝珠形をしており、高さ5.1cmである。中央に直径0.7cmの穴が穿孔されているが、下から4.0cmのところで止まっている。また、蓋、台座、つまみの中央部にも0.7cm～0.8cmの穴が穿孔されており、これはおそらく軸木のようなものが下から貫通していたと思われる。

土師器（92～100）

92を除けば、いずれも小皿である。95～100は糸きり底、93、94は手づくねに近い手法でつくられている。また、92は土壙の埋土中から出土した碗の底部で、高台をわずかにつくり出している。

鎌（101）

全長約13.0cmの雁股式鉄鎌である。二股に分かれた刃部の内側にのみ刃をつけており、外側や二股の中央には見られない。刃部の箠代部との間に厚さ2mm程の突出帶を設けている。箠代には矢竹との接着の際の木質・樹皮がまかれている。この種の鎌については、鞍馬寺経塚、京都府久美浜町の権現山古墳から発見された経塚に類例が見られる。

鎌（102）

先端を失っているが、現存長約 12.5 cm の長頸式鉄鎌と考えられる。範代部には、厚さ約 4.0 cm の木質と丹念に巻かれた糸が良く残っている。

鎌 (103)

全長 15.5 cm の長頸式鉄鎌で、2号経塚出土のものと同じタイプのものである。刃部は先端に近づくにつれて、広く薄くなり、斜めになった先端にのみ刃をつける。刃部の下端は徐々に拡張させた後、段をつけて範代部に接続しており、鎌の装備に備えている。

刀 (104)

全長 34.5 cm、刃渡り約 28.0 cm の短刀である。2号経塚のものと比べると刃渡りは 5.0 cm 程長くなるが、茎は 3.0 cm 程短くなる。茎のほぼ中央に 1 か所目釘穴を有する。刃部全面にわたって木質がよく残っている。また茎にも一部木質が付着している。

まとめ

経塚の構造は、土壙を穿ち、その底に偏平な石を置き、周囲に板石を組み合わせて、石室をつくり経筒を納めるか、あるいは土壙の底に経筒を置き、外筒に入れるか、または甕などをかぶせている。

ところが、田多地経塚群の場合、いずれも径 2 m 前後の土壙を穿った後、その底から東または西の壁を横方向にくり抜き、その中に板石を組み合わせ石室を設けている。出土する遺物等の検討から 3 基の経塚はいずれも、平安時代後期のもので、埋納遺物のうえからは時期差を決定するのは難しく、特に 2 号経塚と 3 号経塚の埋納遺物は全く同じもので、同時期に構築されたと考えても差し支えない。適切な呼称については、将来の検討に委ねるとして、説明の都合上、便宜的に横口式の石室と仮称した。

横口式の石室は、近年、鎌倉時代前半ごろに比定される京都府熊野郡久美浜町の権現山古墳から 4 基の経塚群が発見され、その内 2 基が横口式、他の 2 基が一般的な経塚である。但馬・丹後地方では今後、この横口式の石室をもった経塚が発見される可能性が出てきた。

この横口式石室をもつ経塚については今のところ、田多地、権現山の 2 例しかなく、横口式の石室の構築方法を採用した目的なり背景については、早急に結論を出すのは今のところ無理であり、類例の増加を待って改めて検討すべきであろう。

表2 田多地3号墳～6号墳、主体部一覧表

3号墳

| 主体番号 | 立地 | 長軸方向 | 主体部内容 | 掘り方規模 | | | 棺規模 | | 人骨 | 副葬品 |
|------|-------|---------|---------|-------|-------|------|-------|------|----|--------------|
| | | | | 長さ | 幅 | 深さ | 長さ | 幅 | | |
| 1 | 墳丘平坦面 | N-80°-E | 木棺 | 残1.33 | 0.40 | 0.40 | — | — | | 内行花文鏡 |
| 2 | " | N-80°-E | " | 4.70 | 残2.26 | 1.20 | 3.30 | 0.50 | | 鉢3 |
| 3 | " | N-78°-E | 組合式箱式石棺 | 2.70 | 残1.20 | 0.80 | 1.57 | 0.27 | 2 | 鎌1 |
| 4 | " | N-93°-E | 割竹形木棺 | 3.18 | 2.20 | 0.86 | — | 0.90 | | 壺甕 |
| 5 | " | N-95°-E | 組合式箱式石棺 | 3.28 | 1.84 | 0.87 | 1.66 | 0.28 | 1 | 鉢1 |
| 6 | " | N-94°-E | " | 4.35 | 残2.84 | 0.84 | 1.60 | 0.32 | 1 | 剣1 |
| 7 | 墳丘斜面 | N-15°-W | 木棺 | 残3.13 | 2.07 | 0.28 | 残2.70 | 0.52 | | |
| 8 | " | N-18°-E | " | 残2.15 | 0.12 | 0.33 | — | — | | |
| 9 | " | N-82°-E | " | 1.80 | 0.90 | 0.60 | — | — | | |
| 10 | " | N-86°-E | " | 2.12 | 1.26 | 0.42 | 1.61 | 0.32 | | 鉢1 |
| 11 | 墳丘平坦面 | N-19°-W | " | 1.55 | 0.60 | 0.32 | 1.10 | 0.29 | | |
| 12 | " | N-78°-E | " | 0.80 | 0.60 | — | — | — | | |
| 13 | " | N-81°-E | " | 3.34 | 2.65 | 1.24 | 2.25 | 0.75 | | 剣1斧1鉢1管玉8勾玉1 |
| 14 | 墳丘斜面 | N-64°-E | " | 2.50 | 1.17 | 0.65 | 1.80 | 4.30 | | 剣1管玉20勾玉1 |
| 15 | " | N-81°-E | " | 2.48 | 1.15 | 0.37 | — | — | | 土師器片 |

4号墳

| | | | | | | | | | | |
|---|-------|----------|---------|-------|------|------|-------|------|--|---------|
| 1 | 墳丘平坦面 | N-14°-E | " | 1.55 | 0.54 | 0.17 | — | — | | |
| 2 | " | N-104°-E | " | 1.42 | 0.52 | 0.27 | — | — | | |
| 3 | " | N-103°-E | " | 3.27 | 1.45 | 0.78 | 2.04 | 0.46 | | |
| 4 | " | N-108°-E | 組合式箱式石棺 | 1.22 | 1.20 | 0.66 | 0.73 | 0.18 | | 刀子1小玉31 |
| 5 | 墳丘斜面 | N-5°-W | 割竹形木棺 | 残1.54 | 0.10 | 0.40 | 残1.54 | — | | |
| 6 | " | N-6°-W | 木棺 | 残1.90 | 0.93 | 0.55 | 0.97 | 0.30 | | |
| 7 | " | N-57°-E | 割竹形木棺 | 3.00 | 1.10 | 0.35 | 2.57 | 0.50 | | 甕 |

5号墳

| | | | | | | | | | | |
|---|-------|----------|-------|------|------|------|------|------|--|-----|
| 1 | 墳丘平坦面 | N-105°-E | 木棺 | 2.36 | 0.98 | 0.58 | 1.37 | 0.37 | | |
| 2 | " | N-103°-E | " | 2.30 | 1.50 | 1.00 | 1.32 | 0.40 | | 鉄器片 |
| 3 | " | N-102°-E | 割竹形木棺 | 2.53 | 1.34 | 1.33 | 1.56 | 0.57 | | |
| 4 | " | N-109°-E | " | 2.00 | 1.22 | 0.55 | — | — | | |
| 5 | " | N-104°-E | 木棺 | 4.67 | 3.08 | 1.15 | 2.73 | 0.50 | | 鉢1 |
| 6 | " | N-103°-E | " | 2.25 | 1.17 | 0.85 | 1.85 | 0.32 | | |
| 7 | 墳丘斜面 | N-103°-E | " | 4.20 | 1.97 | 0.77 | 2.97 | 0.47 | | |
| 8 | " | N-12°-E | " | 3.43 | 1.70 | 0.47 | 1.44 | 0.35 | | |

6号墳

| | | | | | | | | | | |
|---|------|----------|---------|------|------|------|------|------|---|----|
| 1 | 墳丘斜面 | N-102°-E | 割竹形木棺 | 2.92 | 1.00 | 0.50 | 1.97 | 0.26 | | 甕 |
| 2 | " | N-108°-E | 組合式箱式石棺 | 2.63 | 1.76 | 0.90 | 0.17 | 0.45 | 1 | 鉢1 |